

「哀弟死去作歌一首并短歌」の漢語表記について

——墓誌銘受容の可能性をめぐる——

夏 傑 倫

一 はじめに

『万葉集』巻九に田辺福麻呂歌集所出の歌が収められており、その中に弟の死を悼む「哀弟死去作歌一首并短歌」と題される歌群が見られる。以下の通りである。

哀弟死去作歌一首 并短歌

父母が成しのまにまに 箸向ふ弟の命は 朝露の消やすき
命神の共争ひかねて 葦原の 瑞穂の国に 家なみか また帰
り来ぬ 遠つ国 黄泉の境に 延ふ 薦のおのが向き向き 天雲
の 別れし行けば 闇夜なす 思ひ迷 匍匐 射ゆ鹿の 心を痛
み 葦垣の 思ひ乱れて 春鳥の 哭のみ泣きつつ あぢさは
ふ 夜昼知らず かぎろひの 心燃えつつ 悲悽別焉

(九・一八〇四)

反歌

別れても 復も遭ふべく 念ほえば 心乱 吾恋ひめやも 一云
意尽して (九・一八〇五)

あしひきの 荒山中に 送り置きて 還らふ見れば 情苦し
も (九・一八〇六)

従来、この挽歌歌群に関する論究が少なく、漢籍受容の視点からの考察に至ってはさらに少ないようであるが、表記の視点からの漢籍受容については、奥村和美氏に論考があり(後述)、表現からみた漢籍受容については、廣川晶輝氏が最初の「父母が成しのまにまに 箸向ふ 弟の命」の表現は『芸文類聚』(巻三十四、人部十八、哀傷)に見る潘岳「為楊長文作弟仲武哀祝文」の「我が弟と我と、並びに垂髪より、成人に越えたり」と類似すると指摘している。それ以外の関連する論考は見当たらない。

田辺福麻呂歌集歌には特殊な用字が多く見られることが早くから

横山英氏⁽²⁾、原田貞義氏⁽³⁾、古屋彰氏⁽⁴⁾ら先学の研究により指摘されている。ただ、奥村和美氏⁽⁵⁾が説くように、それらの研究では、主に仮名の用字の特異性を検討することによって、歌集歌原本のありようを復元することと、歌集歌が福麻呂以外の歌人の歌も含めて現在の諸巻に分割編纂されていく過程を解きほぐすことに重点を置いたのであり、特異な文字選択にどのような表現意図があったかについては、あまり触れていなかった。奥村和美氏はそれに気づき、福麻呂歌集の訓字と訓仮名の中から、特異な用字を取りあげて訓詁の面から詳しい考察を行った。その論文では、福麻呂は漢字の訓詁を利用することによって歌に多彩に意義を付加しようとするということ、その表意性への志向が、訓仮名とも連動して歌を華やかに装飾する方向へ向かったことが指摘された。

しかし、奥村論文では、当該「哀弟死去作歌一首并短歌」の歌の表記も考察されているが、なお検討の余地が残されている表記も少なくないと筆者は考える。つまり、当該歌群には、珍しい二文字漢語がいくつも見られ、それらの漢語は墓誌銘に用いられる漢語でもあるのだ。

上代文学が中国からの墓誌類を受容していたことは、後述するよう以前からすでに指摘されており、当該歌群は弟の死を悼む挽歌であるため、中国の墓誌銘から表現を学んだ可能性も考えられるだろう。

そこで、本稿では以上の先行研究を踏まえ、「哀弟死去作歌一首

并短歌」に散見する二文字漢語を取り上げて、中国の文献、特に墓誌銘との関わりに注目しながら検討を加え、それらの漢語の性格と受容実態を明らかにしていきたい。

二 「悲悽」

まず、長歌最後の句の「悲悽」の語性を見てみよう。「悲悽」の表記は集中一例しかなく、実際唐までの漢籍・仏典においても希少な漢語である。諸注釈書は『新日本古典文学大系』以外にその用例について言及がない。『新日本古典文学大系』では、陶淵明「雜詩其二」の「念_レ此_レ悽_レ悲悽_レ、終_レ晚_レ不_レ能_レ静_レ」を例としてあげているが、陶詩の「悲悽」は志を立てることができなかったことに対して悲しむ意で、福麻呂の弟の死に対する悲しみと語の性格が少し異なるように思われる。「悲悽」の受容実態を考える場合、やはりまず死を悼む表現と捉え、出典を探るのが妥当ではないだろうか。

また、「悲悽」の訓みについて、古写本・古注釈書においては「あはれ」、「いたむ」、「なげく」の訓みが見られ、近現代の注釈書では金子元臣『万葉集評釈』の「いたむ」を除けば、大きくは「なげく」（なげき）と「かなしぶ」の二系統の訓みに分かれる。しかし、『説文解字』に「悲、痛也。从_レ心、非声」、「悽、痛也。从_レ心、妻声」とあるように、心の中の痛みと理解すべきではないかと思われる。

金井清一氏が『万葉集全注』巻九で「ナゲクは声を出したり息をつ

いたりして悲しむのであるから、『悽』にそぐわない」と説くように、「かなしぶ」の訓がより穩当であろう。

「悲悽」に関して、奥村和美論文では、陶詩の「悲悽」は名詞であるため、直接の典拠になったとは言えないと認めつつ、漢語「悲悽」の存することは知識としてあったらうと述べる。また、中国詩文に「悲悽」のほかの用例が拾いがたいためか、奥村氏は「悲悽」を熟語と認めたものの、「悲」、「悽」を分けて検討し、「悲」と「悽」は同じ意味を持つ漢字であり、当該歌では意図的に「悲」に「悽」を加えたこと、「悽」は装飾性を持った、知的に凝った用字であると結論付けた。示唆に富む論考ではあるが、「悲悽」を漢語と認めただ上、まず中国の文献における「悲悽」の使用実態を明らかにした上で、その語性及び受容実態を検討すべきではないだろうか。

「悲悽」は、『漢語大詞典』では「悲傷淒涼」と解され、用例としてはやはり陶淵明の詩が最初にあげられ、その後ろに明清の用例も見られるが、いずれも人の死とは関連しない。『大漢和辞典』にも「悲しみ。悲しく寂しいこと」と名詞として説明され、用例は陶詩だけである。しかし、同辞典では「悲恸」という漢語が立項され、その説明に「悲しみ。悲しんで心を痛めること。また、人の死を悲しむ、悼む」と動詞とも理解されていることは看過できない。同項目に李白の詩「江夏行」の「一種為人妻、独自多悲恸」があげられている。「悲恸」は『漢語大詞典』にも立項されており、「悲傷」と説明され、用例は同じく李白の詩であるが、「一本作『悲悽』」と

説明を加えている。

「恸」の字は、『説文解字』、『広韻』、『篆隸万象名義』等には見当たらず、『類聚名義抄』に「賦株反」としか見えない。また、金の韓道昭の『五音集韻』にも見え、「恸惶煩惱之貌」の意で、「悽」と別項目となっている。しかし、明の『正字通』に至って、「与悽同。『六書故』憂心淒狀也。通作悽、旧註煩惱、非」と、南宋戴侗の『六書故』を引用して「煩惱」の意ではないと意を改めた。

現代の辞書類については、『漢語大詞典』、『漢語大字典』では「Q、同悽」となっているのに対し、『王力古漢語字典』、『古漢語常用字字典』では「xi」の発音となっており、「悽」との関係が述べていない。ここで注意すべきは、『漢語大詞典』の指摘の如く、李詩「独自多悲恸」の表記は、版本によって異なり、「悲悽」と表記している本も多く見られるのである。例えば、現存する最古の版本と言われる宋刻本『李太白文集』では、当該箇所は「悲恸」となっているが、四部叢刊本『樂府詩集』や四庫全書本『全唐詩』に収められている「江夏行」では「悲悽」の表記を取っている。その点については、ここでは詳しく論じないが、筆者の調べた限りでは、「悲恸」も「恸悲」も、中国の文献では当該の李詩以外ほかの用例が見られず、もともとは「悲悽」であった可能性が高いのではないかと考えられる。

さらに注意すべきことは、李詩は商人の妻が旅に出たきり帰らない夫を思い、その情緒を詠ったものであり、『大漢和辞典』が説く

「人の死を悲しみ悼む」ものではないことである。同辞書がどのような証拠に基づきその解釈を示したのかは、不明であるが、以上見てきたように、「悲悽」は、もし「悲恸」と同じ、人の死を悲しみ悼む意で用いられていたとすれば、そこに福麻呂が「悲悽」の表記を選択した理由を求めることもできるのではないであろうか。次は「悲悽」の使用実態を見てみよう。

唐までの中国の文献に限定して確認すると、確かに奥村氏の指摘の通り、「悲悽」の使用例は極めて少なく、調べた限りではせいぜい次の五例しか見当たらなかった。⁽⁶⁾

a 念_レ此_レ懷_レ悲_レ悽_レ、終_レ暁_レ不_レ能_レ靜。

(『陶淵明集』卷四、「雜詩十二首・二」)

b 向_レ日_レ俯_レ仰_レ於_レ林_レ薄_レ之間_レ、但_レ有_レ悲_レ悽_レ慷慨_レ為_レ歎_レ、含_レ蓄_レ辛_レ酸_レ痛_レ楚_レ也。

(六臣註『文選』、陸機「於承明作与弟士童」)

c 一種_レ為_レ人_レ妻_レ、独_レ自_レ多_レ悲_レ悽_レ。对_レ鏡_レ便_レ垂_レ淚_レ、逢_レ人_レ只_レ欲_レ啼。

(『全唐詩』卷一六七、李白「江夏行」)

d 痴_レ坐_レ直_レ視_レ聽_レ、戀_レ行_レ失_レ踪_レ蹊_レ。岸_レ童_レ斷_レ棘_レ勞_レ、語_レ言_レ多_レ悲_レ悽_レ。

(『全唐詩』卷三七六、孟郊「寒溪八首・二」)

e 牙_レ琴_レ不_レ賞_レ、慟_レ哭_レ茲_レ晨_レ。樂_レ弩_レ仍_レ懸_レ、沈_レ羸_レ歲_レ晚_レ。悲_レ悽_レ固_レ託_レ、撫_レ疾

何_レ成_レ。(『全唐文』卷二五八、蘇頌「刑部尚書韋抗神道碑」)

a の陶詩は既に述べたように、志を立てることができなかつたこ

とを悲しく思い、朝が来るまで思いを静めることができないう旨である。b の李詩もc の孟詩も悲しみの意で用いられているが、人の死との関係が見られない。d の『文選』の用例は、陸機が弟に送った詩句「俯仰して林薄に悲しみ、慷慨して辛楚を含む」に対する呂向の注であり、これも人の死に関わるものではない。

一方、e は盛唐の蘇頌が刑部尚書韋抗の死後に作った神道碑文である。蘇頌は韋抗の死を悼むにあたり、伯牙と鍾子期の故事を踏まえて、知音を失った悲しみを今朝の慟哭にたとえて表し、その深い悲しみ「悲悽」をこの文に託している。唐代において、「悲悽」はすでに人の悲しみを悼む際に用いられていた表現である。

そこで、視点を変えて人の死を悼む墓誌銘に目を向けるべきであるが、ここでまず「悽悲」の使用について考えてみたい。というのも、先ほど述べたように、「悲」も「悽」も『説文解字』に「痛也」とあり、ともに「かなしむ」の意味を持つからである。つまり、すでに奥村氏も指摘しているように、「悲悽」は「痛」の意による同義結合の熟語である。したがって、「悽悲」は漢語として「悲悽」と同義であると考えられる。

「悽悲」は初唐までの文献には見られないが、『全唐文』で確認すると、盛唐李華の积教文に

f 緇_レ素_レ号_レ慟_レ、楚_レ越_レ悽_レ悲_レ。⁽⁷⁾

(衢州竜興寺故律師体公碑)

と見られる。衢州竜興寺の体公という禪師の死に関する描写であり、僧侶らも俗人らも号泣し、楚越両地が悲しむという意であろう。また李華の祭文にも、

g 官尊地偏、礼不成_レ儀。回望_三旧邦、素車遲_レ遲。潯陽地古、拳目悽_レ悲。執_レ紼流_レ働、誰堪_三此時。_一〔祭劉左丞文〕

h 悵悵心目、寢寐見_レ之。布_レ奠傾_レ觴、哭_三天涯。天地為愁、草木悽_レ悲。弔祭不_レ至、精魂何依。〔甲古戰場文〕

と確認できる。中唐に下ると、

i 或喪或存、山川是違。繫我夫子、宜相清時。命之不_レ遐、孰不_三悽_レ悲。嗚呼哀哉。〔柳宗元「為韋京兆祭太常崔少卿文」〕

j 迅風悽_レ悲、頽景幽幕。傾都殄瘁、揮_レ涕相顧。矧茲故人、誰任_三痛慕。〔柳宗元「為李京兆祭楊凝郎中文」〕

k 詰朝愀然、有_レ志求_レ医。未_レ撤_三琴瑟、俄懸_三素旂。宸衷震悼、朝右悽_レ悲。詔下褒崇、恩殊_三等夷。_一〔劉禹錫「代諸郎中祭王相国文」〕

とも用例が見られる。なお、李華の「祭劉評事兄文」に「寢門之悲、悽斷_三吳越_二」とあり、「悲」、「悽」を単独に用いる場合も見られる。

以上の例はともに祭文等で人の死を悲しみ悼む場合に用いられている。

ることに注意が要されよう。

以上見てきたように、人の死を悼む表現として「悽悲」と「悲悽」がともに使われていたことが明らかである。そうすると、「悽悲」と「悲悽」の選択は、意味の差異によるものではなく、韻律上の要請によってどちらを用いるかが決まる場合も少なくないと考えられよう。

『広韻』によれば、「悲」「悽」はそれぞれ平声の六脂韻と一二齊韻に属している。先ほど見た「悲悽」のc、d例の「啼」「蹊」は、『広韻』では「悽」と同じく平声の一二齊韻に属し、これらは韻を踏んでいることになる。

一方、「悽悲」の例に関しても、例えば、gの「儀」「遲」「時」がそれぞれ五支韻・六脂韻・七之韻に属しており、同韻かとても近い韻である。iの柳宗元の祭文も、「違」が八微韻、「時」が七之韻のように、「悲」と韻を踏む。kの劉禹錫の例においても、「医」「旂」「夷」は、それぞれ七之韻、八微韻、六脂韻に属する字である。止攝に属する支・脂・之・微の四韻は、唐詩文においてしばしば通押されることがあり、ここでは詳細を省き、一例のみを挙げるにとどめる。すなわち、王維「送綦毋潜落第還郷」では、「歸・薇・非・衣・違・扉・暉・稀」のごとく、微・脂・支の韻が交錯して用いられている。

一方、「悽」が属する一二齊韻については、王力が早くも指摘しているように、齊韻の字はごく一部の場合にのみ微韻・佳韻・灰韻

との押韻が許容されるが、支韻との通押は決して許されないのだ。⁽⁸⁾

したがって、「悽悲」という語が頻用されたのは、齊韻の字を直接押韻に用いることが困難であったため、これを脂韻の「悲」と組み合わせることで、韻律上の制約を回避する役割を果たしたものと考えられる。

さて、墓誌銘の場合、「悲悽」と「悽悲」の用例はどのようになっているだろうか。ここでは、「中国歴代墓誌数拠庫」および「中華石刻数拠庫」を用いて確認してみたい。両データベースは、先秦から当代に至る歴代の墓誌をはじめとする碑刻資料を網羅的に収録した大規模なデータベースであり、その基盤を従来の主要な紙媒体資料に置きつつも、新出の石刻や拓本などの資料も収録の対象としている。盛唐までの文献に限定してみると、「悲悽」と「悽悲」はどちらも見られるが、興味深いことに、六朝から盛唐までの墓誌銘には圧倒的に「悲悽」が用いられる方が多い。

l 羽挽悽悲、竜軒不_レ息。
(魏)「楊仲宣墓誌」 532年

m 似_二蓋樹委、如_二樓鼓橫。悲悽童谷、哀慘松声。
(隋)「正義大夫寧贇碑」 609年

n 嗚呼哀哉。痛心疾首、行路悲悽。

(隋)「大隋儀同三司建州刺史故徐使君墓誌銘」 612年

o 寒山揺落、荒隴哀蕪。悲悽霧沼、薤咽霜塗。

(唐)「故北平縣令董府君墓誌」 659年

p 悲悽風樹、痛貫_二泉門。髣髴如_レ在、依希或存。

(唐)「故清漳令劉君墓誌」 687年

q 嗚呼哀哉。郷閭氣絶、行路悲悽。孤子哀号而气咽。

(唐)「大周田府君墓誌銘并序」 700年

r 黄泉長訣、白日悲悽。松風夜哭、薤露朝啼。

(唐)「故李府君墓誌銘」 758年

右に見たように、最初の一例を除けば、すべてが「悲悽」であり、人の死を悲しむ表現として用いられている。r 例以外については韻を踏むことは考慮外であろう。それにもかかわらず「悲悽」が多用されているのは、「悲悽」がすでに一つの熟語として定着していたためにほかならない。また、これらの「悲悽」および「悽悲」は、先に見た人の死に関わる用例と同様、いずれも形容詞あるいは動詞であり、名詞ではない。この点は、『大漢和辞典』における「悲悽」の説明を想起させる。

また、墓誌銘では、先ほど見た李華の「寢門之悲、悽断_二呉越」のように、「悲」、「悽」は単独に用いられながらも、呼応的に一文の中に配置される例も多く見られる。⁽⁹⁾

痛結風悲、悽涼旧駕。
(大唐故姚君墓誌銘) 644年

痛結風悲、悽涼旧帳。

(唐故洛州河南県崇政君齊夫人墓誌銘并序) 646年

榮獨之悲、悽如霜葉。

(大唐鄭公典籤故潘府君墓誌銘并序) 664年

悽獨之悲、悽如霜葉。

(唐故陪戎尉周君墓誌銘并序) 667年

悽獨之悲、悽如霜葉。

(大唐故洛州趙君墓誌之銘) 668年

悽獨之悲、悽如霜葉。

(唐故季夫人墓誌銘并序) 669年

榮獨之悲、悽如霜葉。

(大唐故陪戎尉姚君墓誌銘並序) 669年

悽獨之悲、悽如霜葉。

(唐故齊州歷城県令庫狄君墓誌銘并序) 670年

悽獨之悲、悽如霜葉。

(唐故処士任君并夫人孫氏墓誌) 673年

悽獨之悲、悽如霜葉。

(唐故鄧君并夫人陳氏墓誌銘并序) 674年

悽獨之悲、悽如霜葉。

(唐故処士房君墓誌銘并序) 675年

特に「悽獨之悲、悽如霜葉」は、すでに一つの慣用表現となっていたといえる。ただし、初唐のある時期に集中して見られる点は注目すべきであろう。すなわち、この表現は一時的に流行し、墓誌銘に多用されたものの、ほどなく姿を消したと考えられる。

前述のように、「悲悽」と「悽悲」は語順が異なるだけで、意味に差はないとみてよい。すなわち、これらは人の死を悲しみ悼む表現として、祭文や墓誌銘などに多く用いられていた語である。

なお、これらの墓誌銘の作者は、ほとんどが不詳であるが、eの神道碑文の作者は玄宗の宰相ともなった許国公蘇頌である。その文才は『新唐書』「列伝第五十蘇張」によれば、燕国公張説と並び称され、「燕許の大手筆」とも讃えられたという。当時においても、その影響力は大きかったと考えられる。

上代文学が中国の墓誌類を受容したことは、早くから指摘されている。東野治之氏は、中国の墓誌銘は注文を受けて一流の文人が述作することが多く、それが文集を通じて文章の一スタイルとして日本で受容されたと指摘している。⁽¹⁰⁾

また、小島憲之氏は日本の墓誌に中国の墓誌類(墓誌・碑文・弔文・祭文・行状・哀策文・誄など)の文学形態をまねたものがあると論じ、その中、北周の庾信の墓誌銘を明らかに受容したものが見られるという。⁽¹¹⁾ 庾信の文集『庾子山集』に墓誌銘や神道碑の巻があり、その伝来は天平期の書物から確認されており、中国の墓誌銘などが日本に伝来されたことは確かである。ほかに、『日本国見在書目録』「四十物集家」に『文館詞林』千巻が将来されたことも確認できる。『文館詞林』は早くから散逸し、今は数十巻が残るのみであるが、その残された巻に、例えば四百五十二巻など、墓誌銘を主とした巻が五巻も見られる。

qまでの墓石銘・神道碑の諸例は時代的に日本にもたらされたと考えられなくはないが、上代官人たちの目に触れた可能性は極めて低いとみてよいだろう。ただ、これほど多くの用例が現存していることから、当時の墓誌銘・神道碑、さらには他の祭文や誄といった文学形態においても「悲悽」「悽悲」が広く用いられていた時代背景が推測できるのではないだろうか。

福麻呂の当該長歌には、実はもう一つ注目すべき漢語が見られる。それは「闇夜なす 思ひ迷匍匐」の「匍匐」である。「匍匐」についての使用実態はより複雑であり、筆者は稿を改めて記紀万葉における諸例を考察して論述する予定のため、ここでは詳細を省くが、「匍匐」という漢語は、『礼記』『問喪』において親の死の場面に用いられて以来、人の死に際して悲しみを表す語として用いられてきた。しかし、隋までの使用例は存外に乏しく、しかも用いられる場合は例外なく親の死の場面に限られていた。

しかし、墓誌銘の用例から見ると、「匍匐」は唐に入ってから使用例が一気に増え、やがて親の死という限定された場面から離れ、身分や地位に関係なく、親しい人の死の場面にも自由に用いられるようになったことが分かる。

一方、日本の場合も、記紀万葉において親の死ではない場面で「匍匐」が用いられており、その用法は初唐の墓誌銘と一致している。これは、上代文学が初唐の墓誌銘を受容したことを示す一つの証拠であろう。

三 「心乱」

別而裳 復毛可遭 所念者 心乱 吾恋目 八方 一云、意尽而

(九・一八〇五)

反歌の一首目の歌の第四句が「心乱」と表記されており、訓み「ころみだれて」が定訓になっているが、この句に対して歌の最後に「一云意尽而」と異文が書き加えられている。この異文に関して初案説と別案説とがあり、今日は初案説が一般的なようである。

この節では、仮に「意尽して」が初案であったとすれば、なぜ福麻呂が最終的に「心乱れて」という表現、さらに「心乱」という二文字表記を選択したか、その語性の観点から考察してみる。

「心乱れて」は、集中この一例しかなく、新編日本古典文学全集『万葉集』が指摘しているように、「思ひ乱れて」の方が一般的で、第三句の「念ほえば」と重複を避けるために第四句を「心乱れて」と表現した可能性は否めない。しかし、ここで看過できないのは、歌全体の表記である。四句目を除き、例えば、初句の「別而裳」のように、二つの助詞がそれぞれ「而」「裳」で表記され、ほかの第二、三、五句もそれぞれ「毛」「者」「目」「八」「方」で表記されており、四句目の「ころみだれて」の「て」だけが省略され、「心乱」と二文字のみで表記されている。

また、長歌にあった類似表現の「思ひ乱れて」も「思乱而」、異文の「心尽くして」も「意尽而」と、「て」が表記されていることを考慮すると、「心乱」の表記が意図的にされた営為と考えざるを得ない。

では、なぜ福麻呂がここに意図的に「心乱」と表記したのであるうか。それはおそらく、「心乱」が漢語だからではないであろうか。

日本の文献では、「心乱」という表記が初めて見えるのはやはり福麻呂の当該歌であろう。『万葉集』に当該例のほかにも用例がなく、記紀においても漢語表記「心乱」も和語「心乱る」も用例が確認できない。当該歌以外、和語「心乱る」の使用例が確認できるのは『源氏物語』を待たなければならない。

『源氏物語』には「心乱る」を用いた表現が二十六例も見られ、その後の日本文学においても多く用いられるようになった。二十六例の中、例えば、「幻」巻に紫の上が亡くなった後、源氏が紫の上に仕えていた女房たちに自分の悲しみを話し、

これかれ、かくて、ありしよりけに目馴らす人々の今はとて行き別れんほどこそ、いま一際の心乱れぬべけれ。いとほかなしかし。

と、これから親しい人と死別した時は一層心が乱れるだろうと言っている。『源氏物語』においても、人に死なれた悲しみを「心乱る」

と表現しているのである。

「心乱る」という表現は紫式部がどこから得たか確定し難いが、後で述べるように漢語「心乱」は漢籍や仏典には数多く見られる漢語である。式部とほぼ同時代の慶滋保胤の「為二品長公主尊子四十九日御願文」に、「公主臨終之間、西面憑几、寸心不_レ乱、十念無_レ休」とあり、尊子内親王の死に際に「一寸の心も乱れない」と卓越した仏性を称賛した表現が見える。また『法華経』を聴講した後のその賦にも、「往昔無_レ信心、無_レ善心、其心或_レ乱_レ心」と見え、当時は仏典の漢語「心乱」が受容されていることが窺える。

願文は『枕草子』に「書は、文集。文選。新賦。史記。五帝本紀。願文。表。博士の申文」とあるように、平安朝の知識人たちにとつて必読のものであったであろう。紫式部の漢文教養が高いことは周知の通りであり、ここでは論じるまでもないが、一方で『枕草子』では「集は古万葉。古今」と述べられるように、平安時代においては、『万葉集』も必須的な教養であり、『源氏物語』に『万葉集』の受容が多く見られることにも注意すべきであろう。

現在のところ、鈴木日出男氏¹²⁾によれば、『源氏物語』に『万葉集』から受容したと思われる表現は、『古今和歌六帖』に見られる歌を除いても、巻二く巻五、巻七く巻十二、二十巻にわたって見られる。特に「浮舟」の巻で、薫・匂宮の二人の板挟みとなった浮舟が入水すると決意するとき、

昔は、懸想する人のありさまの、いづれとなきに思ひわづらひてだにこそ、身を投ぐるためしもありけれ。

という描写に関して、鈴木氏は『万葉集』巻九の一八〇九〜一八一一番高橋虫麻呂の挽歌「見菟原処女墓歌一首并短歌」を引歌として掲げている。ただ、氏が指摘しているように、複数の男に言い寄られた女が、思いあぐねて死を選んだ伝説を詠んだ歌は集中にもほかに多く見る。¹³『源氏物語』の当該箇所は菟原処女のことを指しているか否かは確定しかねるが、もし、そうだとすれば、虫麻呂歌のすぐ前の福麻呂の当該歌も無論式部の目に触れただろう。たとえ引歌は虫麻呂の歌でなくても、巻二から二十まで『万葉集』の多くの巻の受容が見られることは、紫式部が全巻の『万葉集』を読んだ可能性が推測されよう。

そうなると、紫式部の「心乱る」表現は福麻呂の歌から習った可能性も浮き彫りにされる。ただ、後で見る仏典における漢語「心乱」の用例と、先ほど確認した平安朝の仏典受容の時代背景を考慮すれば、『源氏物語』における「心乱る」表現は、福麻呂歌からの影響も否定はできないが、むしろ願文や仏典との関連を想定する方が妥当であろう。

漢籍において、「心乱」はよく見られる漢語で、例えば、後漢張仲景『傷寒論』には「汗家重発汗、必恍惚心乱」との記載があり、「心乱」の語はすでにこの時期に見える。この「心乱」は生理的症

状である。

また、例えば、『玉台新詠』にも『文選』にも収載された陸機の「为顾客彦先贈婦二首」の二に、

隆思乱心曲、沈歎滞不起。歡沈難冠興、心乱誰為理。

（『文選』二十四卷、贈答）

のような使用例も確認できる。二首は、都にいる夫が侘しさを述べ、故郷に居残る妻への思いを詠んだ詩である。この四句の大意は、「さかな悲しみはこころの奥までをも乱し、そのために歎びは沈み滞って起こすことができぬ。歎の心が沈んでなかなか興じがたく、乱れた心を何とて理めとのえられようぞ¹⁴」であり、ここの「心乱」は、妻への思いが繁く心を乱し、とても憂鬱で落ち着かない意であろう。

一方、「心乱」は漢訳仏典語でもあり、仏典には夥しく見え、例えば、「我若心乱不入静慮波羅蜜多」（『大般若波羅蜜多經』巻第一百二、初分攝受品第二十九之四）のような例が殆どで、集中力が無い状態で、心が定まらない煩惱の意で、いわゆる随煩惱の「散乱」に当たる表現である。

また、次のように、悲しみを表現する際にも仏典での使用も指摘できる。

苦痛逼迫。或悩或死。憂悲称_レ怨。啼哭号呼。心乱_レ発狂。

〔『雜阿含經』卷第十七〕

ほかに、『法苑珠林』等に収められた摩訶羅陀という大王の第三子薩埵王子（釈迦の前世）が飢えた虎の親子に自らの肉体を投じた話であるが、大王がそれを聞いて悲しさのあまり気絶した。その後釈迦が唱えた偈に、

四向顧望、求_レ覓其子。煩惋心乱、靡_レ知所在。

とあり、悲しみのあまりにもだえ恨んで心が乱れるという。

さらに、「心乱」は人の死を悲しんで心が乱れる表現として墓誌銘にも用いられることに注意すべきである。「大唐故韋夫人墓誌銘」（七四二年）に「情荒無_レ緒、心乱奚_レ述。瞻望不_レ及、涕淚交溢」とあり、情が荒れ、心が乱れて何も考えることができず、何を述べていかも分からない意である。

この韋夫人の名は韋貞範で、讓皇帝李憲の十一番目の子である李瑄の母である。墓誌銘の作者は李瑄の兄で、李憲の長子にあたる汝陽郡王李璿である。また、墓誌銘の書丹者は元豫という人物であり、墓誌銘によれば李瑄の従兄にあたる。

ここで注意すべきは、李璿と元豫が制作に関わった墓誌銘が、この一例だけではないことである。二〇二〇年、陝西省で新たに墓誌

銘が発見された。それは元大謙と羅婉順という人物の墓誌銘であり、制作年代は天寶六年（七四七年）である。二つの墓誌銘文はいずれも李璿の作で、書丹者はそれぞれ顔真卿と元豫であった。

元豫については史書などの文献に記載がないが、出土後、その書は高く評価されている⁽¹⁵⁾。加えて、二誌の書丹者として顔真卿と元豫が並列起用されている事実は、元豫の書が当時すでに相応の評価を受けていたことを示唆されよう。

現在のところ、現存する盛唐までの墓誌銘に、人の死にまつわる「心乱」は一例しか確認できない。しかし、そのような使用例は、他にもあつたと推測される。また、李璿のような名望ある人物であれば、その墓誌銘は制作直後から文章として知人や文人の間で流布していた可能性もあろう。

「心乱」のほかに「情乱」の漢語も見られ、仏典には「情乱荒迷」の表現も見える。『大般涅槃經後分』に釈迦如来が涅槃した後の悲しみを描く偈があり、その中に、

即知_レ如来已涅槃、故我疾来已_レ不見。

世尊大悲不_レ普_レ我、令_レ我不_レ見_レ仏涅槃。

不_レ蒙_レ一言相教告、我今孤露何所依。

世尊我今大痛苦、情乱迷悶昏濁心。

とあるように、ここの「情乱」は正に心が乱れる意であり、「心乱」

の類語と見て良からう。

以上見てきたように、「心乱」も「情乱」も人の死を悼む時に使用される性格をもつ漢語であることが確認された。

次は一云の「意尽して」という表現を確認する。集中「こころつくす」という表現は当該歌を含めて八例あり、以下のとおりである。

イ念ふらむ 人にあらなくに ねもころに 情尽而 恋ふる 吾かも

(四・六八二、大伴家持)

ロうはへなき 妹にもあるかも かくばかり 人情乎 令尽念者

(四・六九二、大伴家持)

ハ水底に 沈く白玉 誰が故に 心尽而 吾が念はなくに

(七・一三三〇、作者未詳)

ニ手もすまに 殖えし芽子にや 還りては 見れども飽かず 情将尽

(八・一六三三、作者未詳)

ホ別れても 復も遭ふく 念ほえば 心乱れて 吾恋ひめやも 一云、

意尽而

(九・一八〇五、田辺福麻呂)

へみをつくし 心尽而 念へかも ころにももとな 夢にし見ゆる

(十二・三二六二、作者不詳)

トちちの 実の 父のみこと ははそ葉の 母のみこと おほろか

に 情尽而 念ふらむ……

(十九・四一六四、大伴家持)

チ世間の 常なきことは 知るらむを 情尽莫 大夫にして

(十九・四二一六、大伴家持)

八例の中、ハ、ニ、へは作者不詳の歌であり、イ、ロ、ト、チは家持の歌である。また、ニは作者が確認できないが、題詞「或者贈尼歌二首」と、その後の一六三五番歌の題詞「尼作頭句并大伴宿祿家持所詠尼続末句等唱歌一首」から家持周辺の歌であることが分かる。注意すべきは、この五つの家持周辺歌の表記がすべて「情尽」であることである。ハとへの歌は作者が分からないが、『万葉集釈注』は巻七と巻十二の歌の配列を考慮し、この二首はいずれも奈良期の「今」の時代と指摘している。つまり家持の時代なのである。二首は巻が異なるにも関わらず、「心尽」の表記に統一している。また、当該の福麻呂歌集歌は集中唯一の「意尽」の表記を用いている。福麻呂も家持と同じ時代であるから、「こころつくす」という表現は奈良期に入ってから歌に現れ始めたことになる。

『万葉ことば辞典』によれば、奈良天平期の歌人によって心の表現が豊かにされ、多彩な形で具体化されるようになったという。その中、とりわけ家持が果たした役割が大きいとの指摘がある。八例のうち四首が家持の作であることから、「こころつくす」表現は家持が比較的早い段階で用いたものと推測される。八首の中、イロハニへは恋歌であり、ホは弟に対する愛情で、トは親の子に対する愛情であり、チは子が親に対する愛情である。すなわち、集中の「こころつくす」表現は、主に親しい人に対して心を傾ける場合に使用

れていると言えよう。さらに注意すべきは、これらの用例は当該の福麻呂歌集歌のほか、死との関わりは見られない。

『万葉集』だけではなく、古代日本文学には、翻訳語が数多く含まれており、一見して和語と見まがうが、実は翻訳語であることがよくありうることに⁽¹⁶⁾ついて、すでに指摘されている。ここでは、「こころつくす」という和語がもし漢語からの翻読語だった場合、その漢語の語性を確認しておきたい。

「こころつくす」は漢語から翻読された表現だとするならば、その元の漢語は「尽心」または「尽情」だと考えられよう。

「尽心」、「尽情」は古くから用例の見られる漢語である。『孟子』には「尽心」篇があり、また「梁惠王上」に「寡人之於国也、尽心焉耳矣」とある。さらに『後漢書』「杜詩伝」にも「詩身雖在外、尽心朝廷」と見え、いずれも国の民衆や朝廷に対して心を尽くす意である。

また、上代官人たちが熟読していた『文選』や『芸文類聚』にもその使用例が多く見られ、例をあげれば、『芸文類聚』巻二十人部四「孝」に、「黄香父為郡五官、貧無^二奴僕、香躬執^二勤苦、尽心供養」と見え、子が心を傾けて親を養う意である。

しかし、恋の詩文では「尽心」の用例が非常に少ないようで、せいぜい宋玉「神女賦」の次の一例しか見当たらない。

余が幃を褰げて御せんと請い、心の惓惓たるを尽くさんと願う。

貞亮の潔清を懐き、卒に我と相難し。

〔『文選』巻十九賦癸、情〕

この賦は楚の襄王が夢で巫山の神女と会って求愛したが、神女に断られた内容である。当該句は「私がカーテンを掲げて中に誘い寵愛したく、心の丈を尽くしたいと思うと、神女は正しく清潔な志を抱いて、こちらに來ることをどうしても承知しない⁽¹⁷⁾」意である。この「尽心」は、襄王が神女に対して愛情を尽くした意であり、家持歌などの歌における親しい人、または憧れの人に対して心を尽くす意と同じなのである。

この「神女賦」は、上代文学に受容されたことについてすでに指摘⁽¹⁸⁾があり、家持の歌にもその受容が見られるという⁽¹⁹⁾。ただ、宋玉の賦では「尽心」のように「心」が用いられており、家持周辺歌では「心」の表記が見えない。もし家持が宋玉の賦から「尽心」を学んで歌に用いたとすれば、歌に「情」が使用されていることを考えなければならぬ。

一方、漢語「尽情」も漢籍に多く見られ、例えば、『遊仙窟』に「伏願歡樂尽情、死無所恨」と見える。主人公の張文成が十娘に答えて言った内容であるが、「どうか思いのまま、歡樂を尽くすことができるならば、死んでも恨みとは思いません⁽²⁰⁾」のように、この「尽情」は、心の欲するまま、思う存分、の意であり、語の性格が少し異なっているように思われる。上代官人たちの『遊仙窟』受容

に関する指摘は多く、ここでは詳細を省くが、家持らが『遊仙窟』を読んだこと、更に「尽情」を知ったことは想像に難くない。

池添博彦氏⁽²¹⁾によれば、集中「こころ」と訓む語は二八六語あり、

漢字一字では、「情」一一八例、「心」一一七例、「意」一三例、「神」三例であるという。また、『万葉ことば辞典』では、集中巻十七、卷二十四の四巻に「情」二二例、「心」七例で、家持関係歌の多い巻四には「情」二四例、「心」一一例であることから家持周辺では「情」の方が好まれたらしいと指摘されている。したがって、もし家持が漢語から「こころつくす」を形成したと考えるならば、「尽情」を学びそのまま翻訳的に詠み込んだのか、あるいは「尽心」を学んだうえで「心」を自らの好む「情」に置き換えて用いたのか、さらに検討を要する。

いずれにせよ、「こころつくす」という表現の典拠を求める場合、まず「尽心」もしくは「尽情」を念頭に置くのが妥当であろう。

また、「尽意」も漢籍に多く見られる漢語であるが、『大漢和辞典』と『漢語大詞典』が説くように「意見、気持ちを暢達する」と「心情を尽くす」と二つの意味が見え、初唐以前の文献においては主に「言不_レ尽_レ意」のように「意見や気持ちを十分に表す」として使われていたようである。「心を尽くす」意の使用例は、中唐に至って元稹の「遣春三首」の一首目の「逢_レ酒判_レ身病、拈_レ花尽_レ意憐」に初めて現れたようである。集中唯一の福麻呂歌集歌にある「尽_レ」の表記は、漢語「尽意」の影響によるものというより、むしろ変字

法に基づくものと考えられる。というのは、反歌二首の歌に「こころ」という言葉は次のように三箇所あり、

別れても 復も遭ふく 念ほえば **心乱** 吾恋ひめやも 一云、意尽
而

あしひきの 荒山中に 送り置きて 還らふ見れば **情苦** 畏

それぞれ重ならないように、意図的に漢字を変えて、表記を多彩にしたのではないだろうか。すでに述べように、福麻呂歌の表記の特徴の一つが特殊な用字を使って表記を豊かにすることなのである。

では、もし異文の「意尽して」が初案であったならば、福麻呂が「心乱れて」に改めた理由やその過程はどのようなものであっただろうか。

先に述べたように、天平期の歌人たちは積極的に心の表現を豊かにしようとしていたのである。そのような表現の中に家持のように中国の文献から漢語を学び、歌に詠み込んだものもあると考えられる。家持との交流が深かった福麻呂も、積極的に家持と同じような姿勢を取ったことも想像に難くない。書史⁽²²⁾を務めた福麻呂にとつて、中国の文献に散見する「心乱」を目にすることは容易であったろう。

また、「尽心」・「尽情」は悲しい場面や人の死に関わる用例があまりなく、日本の文献においても「こころつくす」が人の死にまつ

わる用例は他に見当たらない。⁽²³⁾一方、「心乱」は非常に悲しい場面、ひいては人の死を悲しむ場合にも用いられた漢語である。そこで、福麻呂は当該歌を創作・推敲する過程で、最初に用いた「こころつくす」の表現を諦め、人の死に際して悲しみを表現する語性を持つ「心乱」を「心乱る」と翻訳し、歌に置き換えたと考えられる。ここで敢えて「て」の表記を用いないことも、「心乱」が漢語であることを示唆する意図であったと考えられよう。

「心乱る」という表現は、漢語を歌に詠み込もうとした奈良天平期の歌人の創作姿勢が結実した、一つの到達点なのであろう。

四 「情苦」

この節では反歌二首目の結句「情苦」の表記について考察する。結句の「情苦喪」も諸注に異訓が見えず、共に「こころぐるしも」と訓まれている。助詞「も」に挽歌ゆえの連想的用字「喪」を当てたことについて、すでに奥村和美氏の前掲論文に指摘があり、ここでは論述を省くが、「情苦」も、やはり福麻呂の意図による表記と考えられる。

そもそも「こころぐるし」という日本語の表現は、集中当該歌一例しか見えず、上代文学においてもその使用例が確認できず、平安時代に入って『竹取物語』にその表現がまた見られ始めるのである。言い換えれば、「こころぐるし」という表現も福麻呂が最初に日本

語に用いたことになる。これも漢語からの翻訳語ではないかと思われる。

すでに述べたように、反歌の「こころ」の漢字表記は、変字法の手法を取っており、「こころぐるし」は「情苦」のほか、類語の「心苦」「意苦」も考えられる。

「情苦」は日中の辞書では立項されておらず、漢籍においてもさほど多くないようであるが、『文心雕龍』巻七「鎔裁」に「乃情苦芟繁也」と見え、「繁多な字句を刈り取るのに心理的に苦勞した」のような意であり、語意が少し異なる。

一方、詩歌の場合、例えば、謝靈運「相逢行」に「心慨榮去速、情苦憂來早」があり、「心慨」と「情苦」が対となっており、この「情苦」は心がつらく切ない意であろう。

また、中唐に下るが、「情苦」は墓誌銘にも二例ほど確認できる。それぞれ、

A 已去_レ河北、未_レ至_レ河南、路遭_レ喪親、情_レ苦骨立、捧_レ叩屍柩、
口_レ舐_レ涎唾。⁽²⁴⁾ (唐故河南府新安縣令張公墓誌) 771年

B 家貧身賤、情_レ苦願乖。礼有_二從_レ宜、号_レ乞_二集事_一。

(唐故揚府兵曹參軍隴西縣國公先府君墓誌) 779年

とあり、両例とも心に苦しく思う意と理解できる。例えば、Aは河北から河南に向かう途中で親を亡くし、心が悲しくて瘦せ衰えた意

であり、「情苦」は家族を亡くした悲しみを表現する漢語でもあることは言を俟たない。

一方、類語の「心苦」のほうが文献においてより多く見られ、例えば、四部叢刊『易林』に、

山林麓藪、非_二人所_レ処。鳥獸無_レ礼、使_レ我心_レ苦。
(卷一)

鼎易_三其耳、熱不_レ可_レ拳。大路壅塞、旅人心_レ苦。
(卷五)

慈母望_レ子、遙思不_レ已。久客_三外野、使_レ我心_レ苦。
(卷八)

などとあり、初唐沈佺期の「王昭君」詩に「心苦無_二聊_レ頼、何堪上馬辞」が見える。また、『藝文類聚』三十五卷人部十九貧の「貧家賦」にも「至_三日中而不_レ熱、心_レ苦_レ苦而飢懸」とある。これらの「心苦」は先に見た「情苦」と同じ意で、心が切ない、悲しむ意と理解してよからう。

「心苦」は仏典語でもあり、漢訳仏典に、

如是身_レ苦、心_レ苦、善_レ從、善_レ生。
(『中阿含經』卷第四十五)

有二_二種_レ苦、一者、身_レ苦。二者、心_レ苦。是諸聖人以_三智慧力_レ故、

無_レ復_二憂_レ愁、嫉_レ妬、瞋_レ恚等_レ心_レ苦。
(『大智度論』卷第二十三)

など使用例が数多く見られる。これらの「心苦」は「身苦」と二苦と呼ばれ、憂愁・嫉妬・瞋恚などの精神上の苦をいう。しかし一方、

仏見_二衆生煩惱患、心_レ苦_レ如_三母念_レ病子。

(『大般涅槃經』卷第三十二)

とあるように、心が切なく、悲しむ意と思われる使用例も確認できる。さらに、

譬如_二有人父母卒喪身_レ心_レ苦_レ痛。惡魔亦爾。

(『大般若波羅蜜多經』卷第四百五十八)

のように、父母の死に際して「身心」が「苦痛」する、すなわち人の死を悲しむ場合にも「心苦」のような表現が用いられることに注意すべきであろう。時代が少し下ると、盛唐顔真卿の神道碑に、

柳侯招_レ膺永悼、氣索神傷、心_レ苦_レ而忽然忘_レ生、泣_レ尽_レ而繼_レ之以_レ血。

(顔真卿「和政公主神道碑」764年)

とあり、さらに中唐・晩唐に下ると、墓誌銘にも、

窀穸之事、臨_レ穴是_レ覩。霜切野寒、風悲心_レ苦。

(「大唐故王府君墓誌銘」770年)

夫人洛陽羅氏、温淑閑茂、礼法克修。昼哭声悲、素帷心_レ苦。

〔大唐故石府君墓誌銘〕797年)

俯視号殞、北望心苦。携孤護喪、歸於洛土。

〔唐故潤州延陵縣丞李府君夫人東平呂氏墓誌銘〕825年)

遭疾而逝、長夜悠悠。邛山之北、終此千古。黃鳥成詩、使我

心苦。〔大唐左千牛衛崔録事夫人京兆韋氏墓誌〕843年)

とあるように、人の死を悲しむ場合に「心苦」が用いられる例が確認される。また、このような「心苦」の用法は唐代に限られ、他の時代には見られない。

以上より、「情苦」・「心苦」が人の死を悼む際に用いられる性格を持つていたことが確認できた。ただし、墓誌銘および神道碑に見られる「情苦」・「心苦」の使用例は、福麻呂の作歌時代よりやや後になるため、福麻呂がそれらを直接目にした可能性はない。

現段階では、年代的に顔真卿の神道碑より古い用例は確認できず、福麻呂が参考にした文献を特定することもできない。しかし、人の死にまつわる上代の文献における珍しい「こころぐるし」の表現は、漢語の「情苦」・「心苦」からの翻読語である可能性を提起しておきたい。新たな墓誌銘などの出土によって、さらに古い年代の用例が発見されることも期待される。

五 終わりに

以上、田辺福麻呂歌集の「哀弟死去作歌一首并短歌」本文に散見する漢語を取り上げて検討した結果、それらの漢語はいずれも人の死に関わる性格を持つていたことが明らかになった。また、それらの多くが墓誌銘や神道碑に偏在していることから、当該の挽歌歌群を作成する際、福麻呂は墓誌類の文献を参考にしたと推測される。

『万葉集』における墓誌銘の受容については、これまで十分に指摘されてこなかったが、芳賀紀雄氏は巻五・山上憶良「日本挽歌一首」(七九四〜七九九)の前置漢文について、誄・哀策よりもむしろ墓誌・願文の類に根ざす可能性を含むと指摘している。さらに、これを踏まえ、近時、瀬川史子氏は当該の山上憶良の漢文の用語を墓誌銘の表現と詳細に比較することにより、憶良の作に用いられる語彙の中には、ほかの文学形態ではあまり見られず、墓誌銘に特有のものが含まれることを明らかにした。『万葉集』における墓誌銘受容を論じる上で大きな意義を示したと言えよう。

今後は、『万葉集』における他の挽歌についても、墓誌銘受容の視点からさらなる検討を進める予定である。

注

(1) 廣川晶輝「田辺福麻呂をさぐる―氏族と任官から、そして歌人として―」

- 『笠金村・高橋虫麻呂・田辺福麻呂 人と作品』(おうふう、二〇〇五)
- (2) 横山英氏『万葉私考』「巻六論」(さるびあ出版、一九六六)
- (3) 原田貞義氏『万葉集の私家集―田辺福麻呂歌集―』『国語国文研究』第4号(北海道大学国文学会、一九六八)
- (4) 古屋彰『田辺福麻呂の用字』『万葉集の表記と文字』(和泉書院、一九九八)
- (5) 奥村和美『田辺福麻呂歌集歌の用字と表現』『叙説』第三八号(奈良女子大学国語国文学会、二〇一一)
- (6) 上述したように、李白「江夏行」の表記はもともと「悲悽」であったと考えられるので、本稿は例に挙げる。
- (7) 佐藤義寛「李華の釈教碑について」(『大谷学報』第七五卷第二号、大谷学会、一九九五)では、当該箇所が「楚越悲悽」となっている。氏はその碑文をどの版本によったか不明であるが、四庫全書本『李叔遐集』と『全唐文』の当該箇所は「悽悲」であり、李華の「祭劉左丞文」、「弔古戰場文」においても「悽悲」が見えることを考慮すれば、「悽悲」の可能性が高いであろう。
- (8) 王力『漢語詩律学上』(中華書局、二〇一五)第二章第三節「古体詩的用韻(中)―通韻」を参考。
- (9) ほかに、「故趙夫人墓誌銘」(669年)には、「勞□□□甚風枝悖之悲悽如霜葉」も見られるが、年代も近いことから、同一の表現である可能性は極めて高い。しかし、墓石の損傷が著しく、上の字数を判断することが難しいため、本稿ではこの用例を取り上げなかった。
- (10) 東野治之「日本古代の墓誌」『日本古代の墓誌』(奈良国立文化財研究所飛鳥資料館、一九七七)
- (11) 詳しくは小島憲之『上代日本文学与中国文学上』(塙書房、一九六二)第一篇第三章「伝来書推定の問題」を参照。
- (12) 鈴木日出男『源氏物語引歌綜覧』(風間書房、二〇一三)
- (13) 引歌として虫麻呂の歌を掲げたのは、当該歌が処女塚伝説として最も典

型的で、最も劇的に構成されているからであると鈴木氏が説明している。

- (14) 現代語訳は全釈漢文大系「文選」による。
- (15) 張揚力掙「顔真卿早年書写的唐代元大謙、羅婉順夫婦墓誌考」『考古与文物』(陝西省考古研究院、二〇二二)を参考。
- (16) 例えば、奥村悦三「古代日本語をよむ」(和泉書院、二〇一七)、山崎福之「萬葉集漢語考証補正(四)―漢語考証の課題と展望―」『国語と国文学』八十六号(東京大学国語国文学会、二〇〇九)を参照。
- (17) 現代語訳は全釈漢文大系「文選」による。
- (18) 代匠記(初、精)、万葉集総釈、新大系に指摘が見える。
- (19) 万葉集の受容以外、例えば、『日本書紀』「神代紀」下にある「骨法非常」が「神女賦」に基づくと新編全集で指摘されている。
- (20) 現代語訳は今村与志雄訳『遊仙窟』による。
- (21) 池添博彦「万葉集の語彙について(2)」『帯広大谷短期大学紀要』第五十号(帯広大谷短期大学、二〇二二)
- (22) 佐野正巳「田辺福麻呂論」『万葉集作家と風土』(南雲堂桜楓社、一九六三)、塩沢一平「和漢の双光―古代官僚田辺福麻呂と宮廷歌人田辺福麻呂」『万葉歌人 田辺福麻呂論』(笠間書院、二〇一一)などを参照。
- (23) 「白虎通徳論」「喪服」に「喪礼不_レ言者何。思慕_レ尽情也_レ。略_レ。故号_レ哭_レ尽_レ情」とあり、死の場面に関わる用例も確認できるが、「心乱」ほど頻繁には用いられず、他に例は見られない。
- (24) 芳賀紀雄「憶良の挽歌詩」『女子大国文』八十三号(京都女子大学国文学会、一九七八)
- (25) 瀬川史子「山上憶良『日本挽歌』の前置漢詩文に関する考察」『美夫君志会 全国大会』令和七年度(美夫君志会、二〇二五)

※本文の引用テキストは以下のものに依拠し、一部改めたところがある。

『万葉集』井手至ほか『新校注萬葉集』(和泉書院)

『源氏物語』『新編日本古典文学全集』(小学館)

墓誌銘・神道碑 「中華石刻教抱庫」

〈<https://inscription-ancientbooks-cn.waseda.idm.oclc.org/doc/Shike>〉

「中国歴代墓誌数抱庫」

〈<http://csid.zju.edu.cn/tomb/#>〉

仏典「SAT大正新脩大藏経テキストデータベース2015版」

〈<https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php>〉